□父をしのぶ 私の好きな絵

嘉納邦子〈小磯画伯次女〉

父の作品の中で一番好きなものを、との質問に私は〝はた〟と困ってしまった。すべての作品に思い出があり、そしてなつかしい。私の日常の中に絵があり、また作品の中に私の生活があった。外から帰るとアトリエの方からプーンと油絵具の匂いがし、「ただ今」と言うと父がやさしい声で「おかえり!」と言ってくれた。

アトリエをちらとのぞくと新しい作品ができていたり、茶色の絵具で下絵が力強く描かれていたり、冷たくなったコーヒーを飲みながら絵の前に立つ父の姿があった。だからすべての絵がなつかしい。幼い頃アトリエの丸い椅子にすわっている写真があるが、その椅子にモデルがポーズをとっている作品。静物に使ったりんごを「ハイ」と手渡されて食べたっけ。私がモデルをさせられたときは、その前で中川さんというお話の上手な方がおとぎ話をしてくださり、それが面白くておりこうにすわっていた。戦争画に出てくる馬が庭につながれていて、おそるおそる側を通ると大きな馬ふんが落ちていた。植木屋さんが軍服を着せられ、一生懸命りりしい顔を作って立っていた。田舎に疎開していた頃は、父と一緒にあぜ道を歩きながら蛙を描き、蝶々を写生し、野苺の赤を塗った。

私も色鉛筆で必死に描いた。でも父はほとんどほめてくれなくて悲しかったけ。その色鉛筆が六十色ほどある立派なもので、父にだまって学校に持って行って友達に羨ましがられた。当時は珍しかった鉛筆けずりでその色鉛筆をピンピンにとがらせて父に叱られた。器用だった父は、その鉛筆入れを自分で帯芯を使って縫っていた。私のリュックサックもミシンをかけて作ってくれたが、その真中に大きな太い字で「小磯邦子」と書いてくれたのを友人に見られて恥ずかしかった。もう少し細い小さな字で書いてくれたらいいのに…と。次から次へと思い出はつきない。さしえを頼まれていた時期は家族はもちろん、お客様から皿小鉢まで作品に登場する。だから同じ人物の顔が違っていて苦笑することもしばしばであった。母子像には私の立派だった乳房が出てくるし、もう四十才になっている息子の可愛い赤チャン時代の姿がある。

晩年父にたずねた。「一つ選ぶとするとどの作品が好きですか?」と。父はウーンと一瞬考えたが画集を出して「これかナ」と滞欧期の「肩掛けの女」の絵をさした。ああやっぱり、私も納得した。このデッサンはその同時期のもので、父が亡くなった後デッサンの束の中から見つけ、あまりの見事さに胸が一杯になった作品である。

肩掛けの女　1929(昭和4)年　油彩・キャンバス115.0×71.5　東京国立近代美術館所蔵

□師をしのぶ

没後10年に寄せて

小島俊男〈洋画家・愛知県立大学教授〉

肖像　1940(昭和15)年　油彩・キャンバス99.9×80.2　兵庫県立近代美術館所蔵

昨年の十二月十四日、東京芸術大学の小磯教室の教え子達が、先生の没後、十年祭を期して、全国から京都に集合した。先生の人柄を偲ばせるように、大きな観光バスが満席の状態であった。淀で墓参をし、六甲アイランドの小磯記念美術館で、小磯良平展の観賞後、ホテルで全員が、遺族の方を交えて先生への色々な思いを語った。充実した一日であった。

墓参の時のことであるが、ある先輩が、卒業以来先生に顔向けできる仕事をしてこれなかったので、いつも気になっていた、墓参を期に来し方を報告できて胸のつかえが下りた。「機会を作ってくれて有難う」と、しみじみお礼を言われた。卒業以来四十年間を経て尚、生きざまの報告が気になる、生徒各々が反応したくなる、先生の教え方とその重さは何であったか、解析する事はできない。丸ごと小磯良平先生の人間像が与える影響に他ならない。

昭和十五年発表の「肖像」についてエピソードを伝えておきたい。この作品はアングルの影響が強いと思われるが、下絵として、基盤の目の升目の引かれたデッサンがある。西欧では正統的な手法で拡大、縮小に使われる。

現在、デッサンも油絵も、端正な画像は西洋風の髷をつけている。昭和十五年に下絵としてのデッサンが描かれ、油絵も同年に発表された。しかし、その時の作品には西洋風の髷はない。時代は、大東亜戦争と称する、第二次世界大戦の深みに入っていき、洋風な呼称はもちろん、ファッションまで洋風を避けるようになり、文化や創造の世界に大きく影響を及ぼしていた。洋風な髷を描くのがはばかられたのであろう。

その後、私が小磯先生の助手をしていた時であったと思うが、先生の心の中に鬱うつと、戦争の時代の圧力への口惜しい思いがあったのか、T家所蔵の作品を借り出し、人物のバックのドアの薄いグリーンを削り取って、西洋髭を足したものである。

全く違和感なく上手くつくものだと感心し、画家の30年に渉る執念の思いに驚いたものである。

街がステージ、みんなでコンサート

元町ミュージックウィーク

MOTOMACHI NEWS 元町通信

芸術の秋、神戸に新しい顔
「元町ミュージックウィーク」華やかに

元町近隣をクラシック音楽の流れるハイセンスな街に―。10月16日（金）から11月1日（日）まで「元町ミュージックウィーク」（主催／元町ミュージックウィーク実行委員会・元町商店街連合会）が開催された。芸術の秋、神戸に新しい顔が加わった。

10月16日、兵庫県公館での「池宮正信とニューヨークラグタイムオーケストラ」の演奏で華やかに幕を開けた元町ミュージックウィーク。各会場には連日多くの聴衆がつめかけた。

「以前から元町界隈で多く開かれていたミニコンサートを一体にすることで、ハイセンスな元町のイメージが高まれば」と、元町ミュージックウィーク実行委員会事務局長の三木久雄さん。実は呉服店「丸太や」のご主人でチェリスト。「音楽をもっと身近に感じてほしい」と、店の2階ギャラリーを会場に、バイオリニストの奥様らとともに小粋なハーモニーを奏でた。

喫茶アマデウスでは「金関環バイオリンリサイタル」など、モーツァルトの調べがコーヒーの香りとともに店内に広がり、神戸教会では「神戸バッハカンタータアンサンブル」、ジャズ喫茶M&Mでのジャジーなライブ、ヤマハミュージック神戸ではフルートアンサンブルやマリンバコンサート…と、それぞれの会場の個性を生かした演奏が光った。

伍芳（ウーファン）さんの古筝演奏会～凰月堂ホール

神戸凰月堂ホールでの「伍芳（ウーファン）演奏会」、ファミリアホールでの「フランティシェック・ノボトニー&伊藤ルミデュオコンサート」など、チケット完売の会場も続出。

WADAホールや我羅里（ギャラリー）、アルチザンハウス、丸太やのほか、神戸市産業新興センター、松方ホールでも協賛コンサートが開かれ、南京町広場などではストリートコンサート。街を歩けば、音楽が聞こえてくる2週間。元町にさわやかな風が吹き抜け、11月1日、元町ミュージックウィークは幕を閉じた。

「ゆくゆくは北野町での神戸ジャズストリートとともに、『神戸音楽祭』ができれば」。三木さんの夢は広がっている。

元町商店街のあちこちでストリートコンサート。写真左は、キッズミュージック、右はオカリナコンサート

フランティシェック・ノボトニー&伊藤ルミデュオコンサート～ファミリアホール

→三木久雄さんらの演奏～丸太や2F

←春待ちファミリーバンド～南京町広場

こうべまちづくり会館開館5周年記念
神戸市立小磯記念美術館所蔵

小磯良平作品展

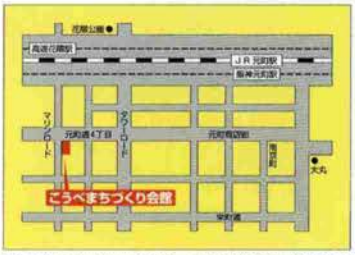
11月7日（土）～23日（月）

元町に小磯良平の風―。元町通4丁目の「こうべまちづくり会館」が開館5周年を記念して、11月23日（月）まで「小磯良平作品展」が開かれている。神戸市立小磯記念美術館と兵庫県立近代美術館での「没後10年展」（11月8日（日）まで）にひきつづき開催されるもので、同展に展示されなかった油彩や素描・版画計33点が公開される。

主な展示作品は、油彩「裁縫する婦人」「婦人像」「K夫人ポートレート」、素描「神戸北野風景」「異人館風景」「御影風景」、版画「街と舞妓」「少女座像」「田舎風のコスチューム」など。

「裁縫する婦人」1940年頃　油彩・キャンバス

「婦人像」1950年
油彩・キャンバス



●会　　場　こうべまちづくり会館ギャラリー
神戸市中央区元町通4―2―14　TEL.078―361―4523
●開館時間　午前10時～午後6時
●観 覧 料　無料
●主　　催　（財）神戸市都市整備公社、こうべまちづくりセンター
●協　　賛　神戸市・神戸市教育委員会・神戸市民文化振興財団・
みなと元町タウン協議会
●協　　力　神戸市立小磯記念美術館　TEL.078―857―5880

●駐車場はありませんので、車での来場はご遠慮ください。

祝　月刊神戸っ子450号

おかげさまで
創業50年

■本店
神戸市中央区元町通6-7-3
TEL.078-341-4847　10：00～18：00
水曜休
■一番街店
神戸市中央区元町通2-3-2ジェムビル2F
TEL.078-332-6100　10：30～19：30
水曜休（第5水曜除く）
■三宮店
神戸市中央区三宮町2-5-12三宮本通り
TEL.078-392-0392　10：00～18：00
水曜休

撮影／池田年夫

神戸新百景〈7〉

小磯記念美術館

石阪 春生

林立する高層マンション群、神戸の新しい島・六甲アイランド。その初めての駅を降りると瀟洒なたたずまいの建物、小磯記念美術館がある。

先生が亡くなられてからしばらくして、アトリエに残された多くの作品をご遺族が神戸市に寄贈されることによって、この美術館が生まれた。

あれから小十年。あの大地震にも耐えて、アイランドになくてはならない美しい景観をつくっている。

当時その創立にあたって、ご遺族と神戸市とそのゆかりの人々にまざって小生もいろいろお手伝いした思い出がよみがえってきます。

小磯先生らしくけっして殿堂風にならないこと、むしろ中世の僧院のような中庭のある回廊風のギャラリーにしてほしい、そしてその庭の中にみんなの思い出深いアトリエを移築してほしいなど、種々なる思いで、神戸市にお願いしました。だが一つの建物の出来るということは大変なことで、その設計の段階でいろいろと意見のくい違いが生まれ、それを修正させていただきながら、ご遺族をはじめ我々のイメージに近い美術館になるまでには、長い時間があったような気がいたします。

特に外壁のタイルの色を決めるのも大変。結論。先生の大切にされていた李朝の壷のベージュ色を模していただき、その色に近づくように何べんも焼いていただいた記憶がよみがえってきます。

小生の思いは小磯美術館に小磯芸術のすべてが集まり、一目でその作品群が観られる館になることがすべてです。

〈洋画家〉

■ 神戸市立小磯記念美術館／神戸市東灘区向洋町中5-7　TEL.078-857-5880
開館時間／午前10時～午後5時（入館は午後4時30分迄）

□私の意見

芸術のまち神戸へ わたしの思い

鞍本　昌男
（神戸市立小磯記念美術館長）

昨今は見ることが追いつかぬほど、各地の美術館で多くの展覧会が開催されている。未知の芸術と出会う機会が増えて嬉しいような、また見逃した時は大変もったいないような気持ちになり、複雑な思いである。

かくいう本館も、今秋は「没後10年小磯良平展」を県立近代美術館と同時開催している。神戸を代表する洋画家の小磯良平さんが亡くなって、早くも十年という年を迎えた。この十年間は、また非常に多くの美術館という施設が各地の市や町にも生まれ、その種蒔かれた美術館が、それぞれの土地に根を下ろし育って来た時期にあたる。今後美術館が成長するには、ますますその土地との強い結びつきと、周囲からの温かい援助・刺激が必要となるだろう。

さる九月二十九日には、六甲アイランドのオルビスホールで舞台美術家・妹尾河童さんの「少年Hと小磯画伯」と題する記念講演会がおこなわれた。画伯が妹尾少年に繰り返し言われた「よく見てごらん」という言葉がとりわけ印象に残っている。自分で見ること、そして感じ、考えること。これこそ人間を成長させる根本であろう。私はさらに、よく聴くこと、あじわうことも付け加えて、五感をすべておろそかにすることのないよう心がけたいと思う。

その意味で音楽を楽しむ時間ももちたいと思っている。幸い、神戸でも多くの音楽会が開かれている。勤め帰りに疲れを癒すこともまた楽しいことである。

将来への望みは、芸術を消費するだけではなく、つくりだす側の人間が少しでも多く育ってくれることである。現在の私たちが問われているのは、何かを生み出しうる人々をなおざりにしてはいないかということである。

心したいと思う。

STEP GLOBALLY 地球を歩く

STEP NATURALLY 自然に歩く

STEP COMFORTABLY 快適に歩く

足に合ったヘルスシューズで快適歩行

「健康な足を健康に保ち、傷んだ足をいたわることを基本理念に、株式会社アリスは、日本で初めてドイツの整形外科靴マイスターを招聘し、健康靴に関するトータルなサービスを提供しています。健康な足を健康に維持されたい方も、足に悩みをお持ちの方も、最新の整形外科水準に基づいて作られ、ドイツから直輸入の健康靴をぜひお試しください。」

株式会社アリス代表取締役　アリス・クリスチャンス

Japan's Premier Health-Shoe Specialist

高級健康靴と関連資材輸入・機材輸入

アリス

〒650-0012 神戸市中央区北長狭通り5-6-6

TEL:078-382-2101 FAX:078-382-2150

営業時間:10:30a.m.～6:30p.m.年中無休

■エッセイ二題

小磯良平先生をしのぶ

御影の風景
1986(昭和61)年
油彩・キャンバス
100.0×72.7
神戸市立小磯記念美術館所蔵

小磯良平先生の思い出

武田誠郎〈広島大学医学部教授〉

私の生まれ育った家は御影の山手にある英国風の洋館で、その壁面には初期の代表的小磯作品が随所に飾られていた。「斉唱」は大広間(おひろま)にあり、すぐ近くにグランドピアノが置かれていた。私は幼少からそこでピアノを弾いていた。小磯先生は何時も「何かモーツアルト弾ける?」と所望された。御自身もモーツアルトを弾きたくて世良臣絵先生のレッスンを時々受けておられた。一九六八年、私が御影の郡家に居を構えた時、父が「マサオはピアノを弾くから」と「斉唱」を私の家に持って来た。「斉唱」は一九七六年、広島に転居する時に父の許に帰った。一九八〇年、父が亡くなり、小磯作品を一括して兵庫県立近代美術館に寄贈することになった。一日、先生と蔵の前のアーケードで寄贈作品を並べて確認をした。先生は「好きな絵は残しておきなさい」と何回か言われた。北野町のアトリエにあった作品は全て空襲で失われたし、回顧展になると先生と父がここで出品作品を並べていたのに何回も立ち会っていたので、好きな作品を残しておく心境にはとてもなれなかった。先生は竹橋の近代美術館にも一枚寄贈してほしいと希望され、後日、竹橋から「斉唱」を所望する手紙が来た。「斉唱」の東京行きには私が反対し、別の代表作が寄贈された。

大阪で戦後初のマチス展があり、中学生の私はマチスに触発され油絵を始めた。我が家の近くのアトリエで仕事をしておられた先生に、お使いにならない絵の具やカンバスをいただいて、家族全員の肖像画を描いた。「ここらは成功してるね」とか「猪熊君ならもっと上手にほめるのだが」などの先生の言葉に舞い上り、高校三年生の時、私は寝ている父を起こし「東京芸大の油絵科を受験したい」と申し出た。父は「小磯さんの様な才能を自分が持っていると思うか。才能の無い絵描きは乞食同然だ」と言って反対した。先生は「出て来る者はいつか出て来るよ」と慰めて下さった。

一九七〇年代には毎週末、先生と父と母と世話役の北野さんで早朝ゴルフが行われていた。私は補欠として時々これに参加した。先生は振子の原理を応用した独自のフォームで球を打たれた。ある時、先生の球が前方に出ていた父の足首に当った。大事をとって父と北野さんは引き上げたが、先生と私は残り数ホールを何事もなかった様にプレーしてホールアウトした。先生はゴルファーだった。

先生のおかげで多くの優れた芸術に出会うことが出来た。ペン・ニコルソンとジャコメッティの絵画、ソール・スタインバーグの漫画、カルティエ・ブレッソンの写真などである。先生はオーデュボーンの版画に鳥や動物と共に描かれている植物の描写がお好きで、その思い入れが薬用植物画譜にはうかがえる。先生は写生の画家であった。新聞小説の挿絵を

着物婦人像
1966(昭和41)年
油彩・キャンバス
80.5×80.0
個人蔵

描かれる時も全て被写体が必要であった。

先生の創作活動は、虚子の句作や茂吉の歌作と一脈通ずるものがあった。我々が呼吸をする様に先生は写生をされた。最晩年、アトリエをお訪ねしたら「御影の風景」があった。甲南病院の様な白い建物の上に描かれた空を拝見した時「先生、この空はエル・グレコですね」と言いかけて思い止まった。先生の奥様も父もこの空の上に召されたと気付いたからだ。先生のレクィエムが聴えて来た。

■プロフィール
武田長兵衛の次男として大阪で生れる。(一九三五)。甲南小学校、中学校、高等学校卒業(一九五四)。大阪大学薬学部卒業(一九五九)。同大学院修了、薬学博士(一九六四)。ロックフェラー大学客員研究員(一九六四—六八)京都大学医学部医化学助手(一九六八)。神戸大学医学部第2生化学講師(一九六九)。同助教授(一九七二)。広島大学医学部第2生化学教授(一九七五)、現在に至る。

小磯良平先生の絵のモデルとなって

星住輝子〈主婦〉

一九六六年、梅田画廊さんのお口添えで小磯先生にお目にかかる機会に恵まれ、おこがましくも肖像画を描いていただくことになりました。

その頃のエピソードといえば遠い昔のことなので詳細に記憶していないのですが、先生の印象は、とてもお優しく寡黙な方というものでした。ただしいちどキャンバスに向かわれると、今までの柔和なまなざしが一変してきびしくなられたことを鮮明に記憶しています。

閑静なアトリエ、昼さがりのやわらかな日ざしの中、聞えるのは先生の絵筆のかすかな音。この雰囲気は、ちょっと他では形容し難い素晴らしいものでした。あまりの心地よさについ居眠りしそうになると、いつも先生は少し休みましょうと優しく声をかけてくださいました。美味しいお茶とお菓子をいただきながらお話するのも、心和む楽しいひとときでした。

私の額の真中(眉と眉の間)にかなり目立つほくろがあり、先生がそのほくろを描いたものかどうしたものかと苦笑しながら暫く迷われたこともほのぼのとした想い出の一つです。後日このほくろが私の絵だという目じるしになるのですが(着物の婦人像画が多く、よく間違われます)。

その後、ある集まりで久々に先生にお会いしましたが、残念ながらその時がお別れになってしまいました。人の世の摂理とは申せ、もう二度とお目にかかれないと思うと口惜しく悲しくてなりません。

数え切れないほどのご遺作はありますが、先生にはいつまでもお健やかでもっと多くの作品を描き続けていただきたかったものを、と我儘な気持を隠せないでおります。

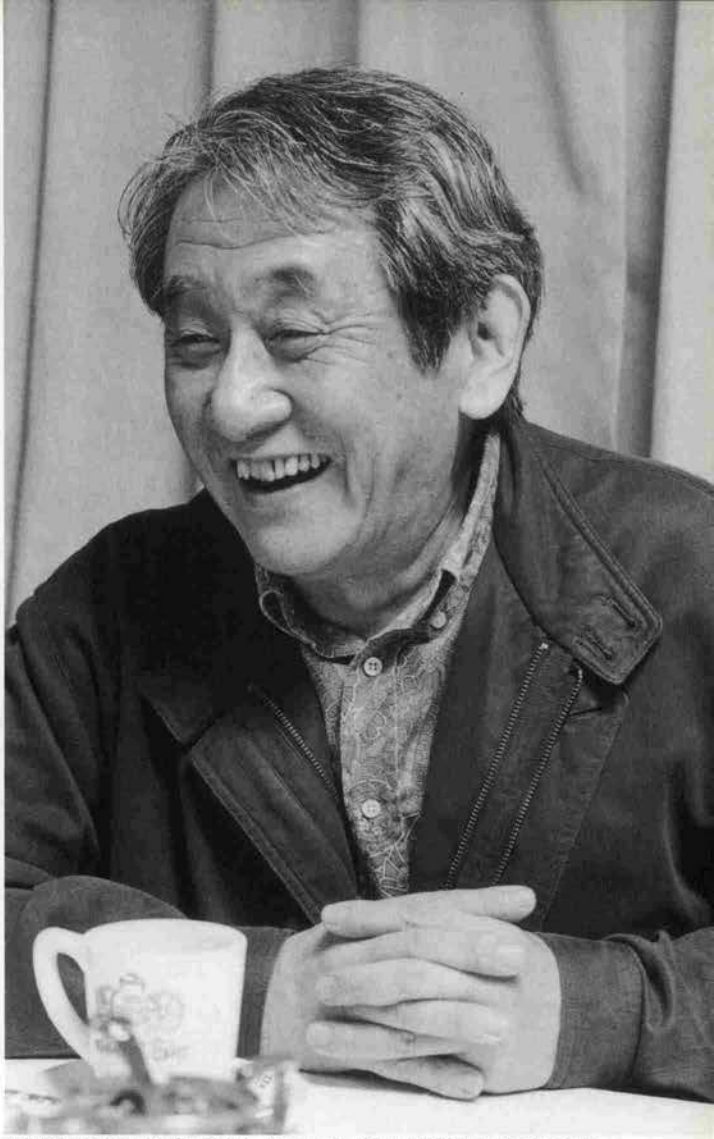
ご立派な先生に肖像画を描いていただけましたことを改めてしあわせだと感謝すると共に、末永く大切に保存していただきたいと願っています。

■特別対談

小磯良平かく語りき「よーく見てごらん」

妹尾河童（せのおかっぱ）〈舞台美術家・エッセイスト〉
石阪春生〈洋画家〉

徒弟制度を嫌ったという小磯良平画伯だが、彼のもとからは多くの才能が花開いた。
舞台美術家の妹尾河童さんと洋画家の石阪春生さんに画伯との出会いを語っていただいた。



妹尾河童（せのお・かっぱ）1830年、神戸生まれ。神戸二中在学中、小磯良平にデッサンを学ぶ。54年、舞台美術家としてデビュー。紀伊國屋演劇賞、芸術祭優秀賞など多数受賞。イラスト・エッセイ『河童が覗いた～』シリーズも人気。ベストセラーとなった小説『少年H』で、兵庫県文化賞、毎日出版文化賞・特別賞、東京都民文化栄誉賞、神戸っ子賞などを受賞。

★「僕の息子です」と、小磯先生

石阪　河童さんが小磯先生に出会ったのは、中学時代だそうですね。

河童　ええ、先生は神戸二中（現・兵庫高校）の卒業生だと知っていたので、どうしても神戸二中に入りたいと思っていたんです。

石阪　子どものころから小磯画伯のことを知っていたんですか？

河童　雑誌の表紙の絵やポスターを描いておられたし、僕の叔父が絵描きだったのでね。

石阪　小磯先生にあこがれていたんですね。

河童　でも僕が入学したころは、戦争が激しくなっていたから、絵画の時間なんか、軍事訓練に取られてなくなっていて、ガッカリしました。校長室の壁に、小磯先生が描かれた『踊り子』の絵が掛かっていると聞いて、見せてもらいに行きました。僕が絵を黙って見上げているのを見て、校長先生が、「君も絵描きになるつもりなら、小磯先生みたいに母校に絵を寄贈できるようになりなさい」と言ったんです。

石阪　たいした校長先生だなぁ。

河童　僕は絵描きではなく舞台美術家になりましたが、あの時の校長先生の言葉を覚えていたので、兵庫高校に舞台美術の模型を寄贈しました。

石阪　で、実際に小磯先生に会われたのはいつ？

河童　戦争が終わった翌年ですから昭和二十一年でした。神戸の街は、空襲で見渡すかぎり焼け野原で、先生のアトリエも焼けてしまったので、塩屋に仮住まいされていた頃です。

石阪春生（いしさか・はるお）1929年、神戸生まれ。関西学院大学卒業後、小磯良平に学ぶ。62、64年、新制作展で新作家賞、66年、協会賞受賞。74年、金山賞受賞。近年は「女のいる風景」シリーズを一貫して描きつづけている。大阪フォルム画廊（東京・名古屋・福岡）、三越ギャラリー（東京・札幌・神戸）、梅田画廊、梅田近代美術館などで個展。現在、新制作協会会員。

石阪　河童さんの家も焼けたんですよね。

河童　ええ、家は焼け、お金もないので、美術学校へ行くことはあきらめていたんですが、なんとかして小磯先生に教えてもらって、絵を描きつづけたいと、塩屋の駅前の本屋さんでお宅の場所を聞きだして訪ねて行きました。

石阪　一人でいきなり？

河童　そう、いきなり。紹介状も持たずに行って玄関の戸を開け、「神戸二中四年生の妹尾肇、先生に絵を見ていただきたくてやってきました」と軍隊調で大声で言ったので、ビックリした顔をされました(笑)。

石阪　そりゃあ驚かれたでしょうね。で、見てもらえたんですか？

河童　持って行ったデッサンを先生は、じーっと見てから、「そんなに描きたいんやったら、来てもええ」と言ってくださったので、一週間に二回ほど通うようになりました。

石阪　面白い出会いですね。いきなりやってきた少年を受け入れてくださるなんて。

河童　先生にはお嬢さんが二人おられましたが、男の子が珍しかったんだと思いますね。

石阪　河童さんはそのとき何歳？

河童　僕は十六歳で、先生は四十二歳でした。京都の学校へ講義に行くときや大阪の展覧会なんかも連れ歩いて、「うちの息子や」と笑いながら紹介されていた。真に受けて驚いていた人もいた。

石阪　それ面白いなあ。

河童　僕をモデルにしようとされたこともあったんですが、その絵は完成しなかった。というのは、僕は自分がどんなふうに描かれているのか見たくてしょうがなかったもんだから、目がキョトキョト動いていたらしい。体は動かさないように我慢していたんだけど、なんか落ちつかない。先生に「じーっとできんのか」と言われ、「僕、じーっとしてますよ」と答えると、「なんやせわしのうて落ちついて描けん。もうええ。君は、中学時代の竹中郁とよう似とる。彼も好奇心が強うてキョロキョロしとったし、あっちこっち走り回っとった」と言われた。詩人の竹中さんとは、中学時代から晩年までずーっと仲がよかったですね。あっそうだ。石阪さんは、竹中郁さんの甥でしたね。そういえば、顔も郁さんとよく似てる。

石阪　それを言われるのは嫌なんです(笑)。小磯先生と竹中は性格が静と動の正反対だったから、お互いにひかれあっていたんですね。

河童　石阪さんが小磯先生に出会われたのは？

石阪　二十七歳のときやったから、あなたより歳は一つ上やけど、河童さんのように息子というわけにはいかんかった。僕は早くから絵を描いていたんですが、小磯先生にとっては竹中の甥が絵を描くというのは嫌やったんと違うかな。だから、新制作展に出品しようと思って絵を見てもらいに行ったら、「この絵はあかんわ」でした(笑)。先生のところに出入りしていた人が新制作に出そうとすると、どうも皆「あかん」と言われていたらしい。小磯先生が所

属している新制作じゃなく、「あっちにしなさい」と他の会を薦められた。

河童　でも、石阪さんは新制作展へ初出品で受賞されているじゃないですか。

石阪　そのころの新制作は抽象画が台頭してきた時代だったので、僕もそんな絵を描いて出した。先生に黙っていたら、それが賞を取ったんです。そしたら先生に、「あれ、君やったんか。えらい変えたなあ」と言われた。

★贋作づくりが進路変更のキッカケに

河童　先生は、自分に似た絵を描くことを、ひどく嫌われていましたね、「小磯良平は一人でええ、僕には弟子はおらん」とよく言っておられた。

石阪　むしろ、「もっと自由に自分の絵を描かなあかん」と言われていたし、弟子という言葉が嫌いでしたね。あるとき偉い方が先生の所へみえたとき、僕がたまたま横にいたら、「友人の石阪君です」と言われたので、恐縮して小さくなりましたよ。

河童　先生風は吹かさない方でしたね。僕には、いつも「よーく見てごらん」という言葉だけで、〝この線が良くないとか、この色が〟とか具体的な指導はまったくされなかったですね。とにかく「よーく見てごらん」の一言だけ。「対象物の本質から、物の質感までよく見て描け」という意味だったのだと思うけど。

石阪　晩年ですけど、銀座で見つけてきたという布を見せてくださって、「見てみなさい、この皺の影はアングルのと同じ時代のものだからいいだろう」とおっしゃった。僕にがどこがいいのかよくわからなかったけれど、照れくさそうに言われる様子がすごく嬉しそうやった。

河童　布のドレープや皺が好きでしたね。「先生は布の皺やドレープがあったりしたら、描きたくなるんですね」と言ったら、「うん、そうや」と言われた（笑）。先生にとっては布もモデルさんの皮膚も同じレベルなんじゃないかと思った。

石阪　「よーく見る」というのは、人の絵に対してもそうでしたよ。特に興味のある人間の絵は、十分くらい動かずに見てはった。こっちが凝視されているようで、困ったものです。絵については何も言わない。それがかえって不気味でしたね。

河童　先生の絵はアカデミックだけど、ヨーロッパに根ざしていろいろ養分を吸われている。若い頃、竹中郁さんと一緒にフランスに行っておられたころ、よーく見てこられたんでしょうね。

石阪　河童さんは、伊藤継郎（つぐろう）さんのアトリエにも行っていたそうですね。

河童　小磯先生に連れられて行ってたんです。関西在住の画家たちは、みんな空襲でアトリエを失っていたから、焼け残った伊藤継郎さんのアトリエに集まって描いていたんです。田村幸之助、児玉幸雄、藤井二郎とかいった錚々たる人たちが一緒にイーゼル並べて裸婦を描いていました。その中に一人だけ生意気な中学生が混じっていた。その子は、それぞれの人の画風が違うのが面白くてキョロキョロして落ちつかなかった（笑）。

石阪　でしょうね。目に見えるようだ（笑）。

河童　伊藤継郎さんは、絵の具を細い筆で塗り重ね、絨毯のような不思議な絵を描いていた。「この技法は秘密や」と言ってね。で、僕はその技法を解明して、そっくりの画風で描くことに成功した。その絵を伊藤さんの絵の横に立てかけておいたら、児玉さんが面白がって、「贋作を描いたら売れるなあ」と言った。みんな笑っていたけど、小磯先生は困った顔をされていた（笑）。アトリエを出て芦屋駅に向かう帰り道で、先生が僕に、「絵描きになりたいんやったら、飽きんと自分の絵を描き続けなあかん。いろんな描き方をしたいんやったら、商業美術のほうが向いてるかもしれん。そのほうがよさそうや」と言われた。

石阪　それで進路を変えたわけ？

河童　中学を卒業してすぐ『フェニックス工房』という看板屋に入ったんです。トアロードの裏に、奥村隼人さんを中心に画家たちが集まってやってた看板屋です。昼間は看板屋なんですが、週に二回夜になると仕事場がアトリエに変わるという店でした。小松益喜、津高和一、松岡寛一さんたちも集まってきて、裸婦を囲んでいた。

石阪　酒飲みばっかりや（笑）。

河童　ここでも大人たちの中で、僕一人が子どもだったから可愛がってもらったけれど、こき使われていた。おまけに給料もロクにもらえなかったですね。ボスは集金に行ってその金で飲んで帰ってくるんだから（笑）。経済的にはどん底で大変だったけれど、絵が描けていたので楽しい時代でもありました。

石阪　大阪の朝日会館へ行ったのはその後？

河童　『フェニックス工房』へ紹介してくださったのも小磯先生だったけど、朝日会館へ紹介してくださ

ったのも先生でした。「朝日会館で、絵も字も書けるデザイナーを探してるけど、どうや、行ってみんか」と言われた。看板屋の『フェニックス工房』で、文字の勉強もしていたのを、先生がご存じだったらしく、前もって友人だった館長の十合(そごう)巌さんに話をつけておいて下さったらしい。

石阪　あなたのことが、よほど心配だったんだ。

河童　でしょうね（笑）。朝日会館での最初の仕事は、小磯画伯のペン画の『アメリカ展覧会』の記念画集に水彩で着色する仕事。「きみ、贋作つくるのうまいから、これに色を塗ってくれんか」って。五百枚も同じように着色するのはウンザリだったんでしょうね。僕は張り切って、精巧に塗りました。先生の直筆と贋作と混ぜておいたら、ご自身も見破れなかったから（笑）。

石阪　その画集、記憶にあるね。あなたの節目節目に必ず小磯先生が関係している。

河童　先生にとっては迷惑なガキだったと思うけど、僕が今日あるのは先生のお蔭だと思います。もし画家を目指していたら、ダメになっていたでしょうね。先生には先見の明がありました。

★女性関係のややこしいのが嫌いだった

河童　それから後は、朝日会館でポスターやパンフレットなどの宣伝美術を担当していました。バイオリニストのメニューヒンが初来日した演奏会のポスターも僕が描いたものです。

石阪　それも覚えてるよ。

河童　藤原歌劇団公演のオペラ『ラ・ポエーム』のポスターを見た藤原義江さんが、僕を呼んで、「きみ、いっそ東京へ出てこないか？」と勧めてくれたんで、しばらくして上京しました。でも、小磯先生には相談しなかった。

石阪　どうして？

河童　小磯先生は音楽が大好きな方だったのに、藤原義江さんはお好きじゃなかったから。女性関係がややこしいというのがお気に召さなかったんだと思う。小磯先生は、女性にも純潔な人だったからでしょうね。

石阪　先生とはそれっきり会ってはらへんの？

河童　十合さんに、「小磯さんに相談せんと東京へ行ったんやな。気分悪うしてはったで」と叱られましたから、先生にはあわせる顔がないと身をすくめていたんです。でも、東京へ出てからも二回ほど会っています。一回目は展覧会場でしたが、二回目の状況がマズかった。僕が女性と腕組んで帝国ホテルから出てきたところへ、バッタリだったから（笑）。先生はビックリした顔をして顔をそむけ、何も言わずに歩き去っていかれた。神戸にいた頃も、先生は僕が女性に惚れっぽいのを、心配されていた気配があったんです。だから不愉快だったと思う。実はその日、月光荘（西銀座の画材店）で、先生と会う約束をしていたんです。その時間まで余裕があったので、女の子と遊んでいたのがバレたんで慌てました。それから十分後の約束の時間に行ってみると、先生はもう帰られた後でした。おまけに、「先生が、あんたの借金を払っていかれた」と店の主人から聞いてガクゼンとしましたね。「もうお前には会いたくない」という先生のメッセージのような感じがして…。

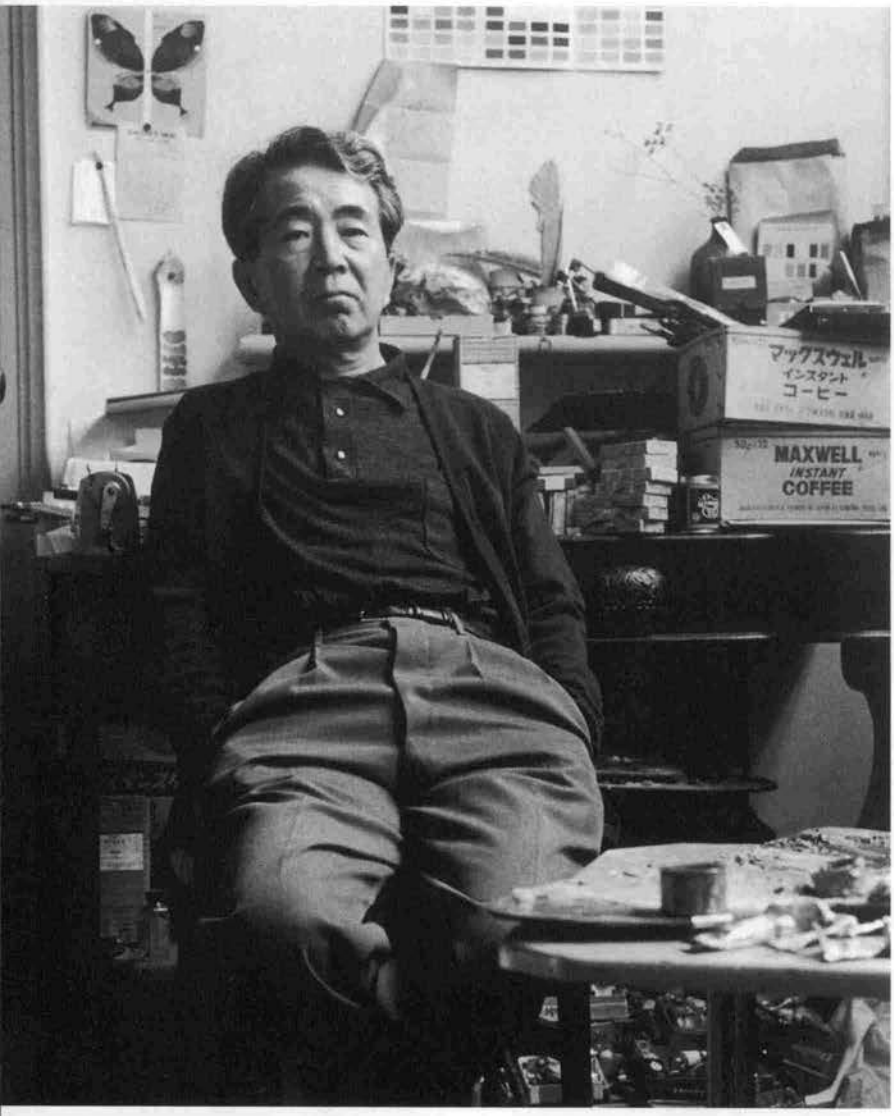
石阪　あなたが勝手にそう思って、ひるんだらあかんのよ。先生はそんなこと全然気にしてないよ。そら嫌な顔はされるけどね。僕なんかも、どれだけ嫌な顔されたか。「きみは鼻持ちならん男や」なんてことをズケズケと言われたんやから（笑）。

河童　そうそう、いま思いだしたことがある。先生のアトリエに行っているころ、「先生は女の人を描いてはるけど、女の人の中身を描いてはらへん」と言って、ムカッとした顔をされたことがあった。『働く男』も、筋肉は凄く描けてるけど、この人労働してへん」と言ったときも、いけなかったですね。あのときも、先生の逆鱗にふれたでしょうね。とんでもないガキだったと思います。

石阪　そんな子だから、先生は面白がっておられたんだと思いますよ。正反対の竹中郁を面白がっていたと同じようにね。実は小磯先生も新しいもの好きやし、おっちょこちょいのところがあったんやから。それを表には出されなかっただけや。あなたのような人が、先生の興味をもつようなことを何かもって帰ってくるのをニコニコと待ってはったんと違うかなあ。そう思うよ。

河童　でも、あのとき先生と別れてよかったとも思うんです。僕はあのとき親離れできたんだと。東京に出てから痛感するのは、小磯画伯は港町神戸の土壌から生まれた画家だなあということと、少年時代は先生に育てられたということ。そして今も仕事をしているときなど、「よーく見てごらん」という先生の声を反芻していることです。

（9月28日、「北野坂にしむら」で）



小磯良平画伯をしのぶ

青木重雄〈元白鶴美術館主事・美術評論家〉

小磯良平さん（以下敬称略）を戦後第一番に訪れたのは、私だったのではないか、と思う。従って私は戦後第一号美術記者ということになる。

戦災で大正十四年以来住んでいた神戸市北野町（昭和七年アトリエ建てる）の家を焼失した小磯は山田村・塩屋・魚崎などと仮居を転々としていたが、私が神戸新聞記者として訪れたのは、たしか昭和二十四年ごろだったと思う。

その時画伯は横尾（灘区）に住んでいたが、平屋の座敷に描きかけの裸婦の大作を置いていたが、私を見るなり、「君、もう僕の絵は古いんじゃあない？」と開口一番言われ、続いて「実はこの春から東京の美術学校に復職したのだが、生徒たちから先生の絵はいつも低空飛行だと言われてね」と、少々悲しげな表情で言われたのには驚かされた。そういえば、当時は抽象画が東京では盛んになりだしていて、画伯のような写実的な絵画は古いと思われる風潮が一方で勢いを得つつあったからである。

だが、同校（現・東京芸大）在学中に「T嬢の像」で帝展特選（大正十五年）、以後、帝展無鑑査で画壇のエリートの地位を獲得、続いて昭和三年神戸二中以来の親友である詩人の竹中郁と共に渡欧して、フェルメールやアングルらの古典、新古典の画風、さらにマネやドガらの印象派からも学んで帰国した小磯芸術の開花は全く素晴らしかった。

さらに昭和十一年の帝展改組以来新しく結成された新制作派協会で時と所を得た魚のように連続発表されたヨーロッパの古典とモダニズム風の絵画は、いかにも気品高く、清雅の感にあふれていた。特に女性画では日本の画界でも独壇場の趣きがあったの

小磯良平画伯と作品。住吉のアトリエで（昭和39年ごろ）

で、それらの絵画を当時美術展や新聞・本のさし絵などで見慣れていた私にとっては、「低空飛行」と言われた先生の言葉が、時代の言わせた言にしろ、いかにも情無く思われて、その時何も言えずにしばらく先生の悲しい表情を茫然と見守っていたのを覚えている。

当時は、関西の画壇は日本画の京画壇はもちろん、洋画壇も多くの英才をかかえて大阪中之島洋画研究所を根城にして、活気があふれていた、パリ帰りの画家も多く、結構東京画壇と拮抗、いや、それ以上の勢力を誇っていた。それが敗戦によってたちまち食うや食わずの状態に追い込まれたのだから、一時は絵どころの騒ぎでなかったことは当然である。だが、それから立ち直った昭和三十年代から四十年代へかけての神戸の洋画壇は多くの若い洋画家によって復興をとげつつあった。その中心的存在であったのが、小磯（新制作協会会員）と田村孝之介（二紀会会員）だった。この二人を指導者として阪神間の若い画家は師事し、勉強を始めたといっても過言ではないだろう。

とりわけ田村の六甲道のアトリエには常に若い洋画家が出入りしていた。中西勝、鴨居玲、西村功はじめ多くの若い画家や関係者でいつもにぎやかだった。奥さんが明るい性格で社交的だったことも内助の功があったといわれている。

これと比べると、小磯のアトリエ（住吉町四丁目）は比較的閑静で、これは画伯の生来の静かで生真面目な性格にもよろうが、いつもコツコツと絵を描いている、いわゆる〝絵の虫〟と呼ばれた態度にふさわしい環境に守られており、田村の〝動〟に対して小磯の〝静〟と呼ばれる姿がいつも見られた。常に同家へ出入りしていて、小磯の生活の世話をしたり、時には小磯の頼みでモデル役をつとめたりもした西村元三朗（新制作会員）の姿がよく見られたぐらいである。

私もよく同アトリエをお邪魔したが、いつも静かで、しかも真剣に同氏との会話ができるのが楽しみだった。『月刊美術』（昭和五十二年十二月号）に書いた人と芸術小磯良平「洋画の真髄を極めた典雅な画業展」という拙文中「時には芸術家というよりも上品な職人さんという気にさせられたり、長時間話していると、つい〝思いやりのある伯父さん〟といった勝手な印象さえ与えられることがある。だが、いったん問題が芸術の本質に触れてくると、小磯さんは一歩も妥協しないし、真剣にその問題を追求する姿勢を示される。例えば、その一例として、一見柔らかいムードや明るさによるふんいきとは全然別質のシャープな線構成や奔放なタッチ、色面による的確な量感などの特技が各所に発揮されているのは、明らかに同氏の執ような芸術的表現の追求の結果を示すものであろう。これらに画然とした氏の卓抜なメチエの跡が見られるのである」の一節にもそ

うした氏の性格の一端がうかがえよう。

私はこういう意味で、西洋画の根本的な勉強を極めた小磯のデッサンが大好きである。古い言い方かもしれないが、「デッサン力の無い画家はダメだ」という言葉は、今でも時代を超えて絵画の歴史には存在していると思う。言い換えれば、小磯芸術の最大の魅力はデッサンであろう。昭和三十九年刊行の拙著『小磯良平画集』（中外書房刊）に、あえてこのころから盛んに見られるようになった竹ペンを使っての心憎いほど素晴らしいタッチの女性像（踊り子・舞妓・母子・女学生など）のデッサン画を数多く掲載したのもこの一念からであった。

一方、田村のデッサンも美しかった。田村の絵をマチスになぞらえると、小磯はドガだろうか—と、当時ファンの間でささやかれていたのを思い出すが、たしかに小磯のバレエの踊り子にはドガの踊り子との類似点が指摘できよう。だが、小磯が一生かけて仕上げた女性像はあくまで日本の女性、それも大正・昭和時代のモダニズムから生まれた「古きよき時代」の上品でノーブルな感じの美人画である。これは現代のいわば「アメリカ主義時代」と一線を画するふんいきをたたえた知性と感性のマッチした女性像である。

大正から昭和へかけて阪神間は日本でも有数のブルジョア都市、文化都市と栄えていた。田中千代のファッションや芦屋・住吉辺りの別荘地帯の建て物も、よき生活のモダニズムの具現化だった。これらの現象をバックにしながらも、それらの極現化に犯されず、上・中・一般階級の女性を対象に氏独特のモダニズム女性像を創造したのは、小磯芸術の真骨頂を示すものであると言いたい。

中学生時代からの親友の詩人竹中郁と連れ立って、というよりも大抵の場合、竹中に引っ張られて、フランスへ行き、また晩年はゴルフにも出かけた小磯の絵画は、どこかに派手さよりも地道な探求心と遊びの精神に裏付けられていたようである。クリスチャンとしての一面もあったが……。

とにかく大正・昭和の二世代にわたってものされた「T嬢の像」「裁縫する女」「肩掛けの女」「斉唱」はじめ数多くの女性像などの作品は、いわゆる日本のモダニズム時代のシンボルとして、また小磯が一生離れずに生活し、描き続けた神戸の遺産として残るであろう。

大好きだったモーツアルトの音楽に画作の寸暇じっと耳を傾けていた巨匠の姿を思い浮かべながら本稿を終えたい。

（十・十・七記）

昭和二十五年（？）に三宮バウリストで催された「芸術家・文化人」集団のカーニバル「どんの会」（DONの会）に小磯が描いたデッサン画。なお、半どんとは関係ありません

Tinkle

ウェディング・ベルにつつまれて
ロマンティックに語る二人の夢

「ココア」と「抹茶」それぞれの
風味を大切に焼き上げました。

ティンクル

T-10（化粧箱220×180×63）￥1,000

北欧の銘菓
株式会社 ユーハイム・コンフェクト

本　　社　〒651-2117　神戸市西区北別府2—1—2
TEL078-974-9756　FAX078-974-9758
グランドール熊内店　神戸市中央区熊内町1丁目8—23
TEL078-231-1428

ママといっしょに

赤ちゃん：**松浦 大二郎** 君
（平成9年3月6日生まれ）
お兄ちゃん：**壮太郎** 君
（平成6年9月26日生まれ）
ママ：**雅子**さん
パパ：**武宏**さん

「明るく元気で、たくさん遊んでね！」

★佐本産科・婦人科★

佐本　学

神戸市兵庫区中道通4-1-15
TEL:078—575—1024（病室TEL:078—577—7034）
市バス上沢4停南スグ
●駐車場完備●